

平成 29 年度

第 2 回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 29 年 9 月 11 日（月）

第2回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成29年9月11日(月) 午後3時から午後5時まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 片野 恵介
委員 加藤 暁子
委員 白井 千晶
委員 杉 雅俊
委員 豊田 由美
委員 仲道 郁代
委員 埴 博
委員 藤田 尚徳
委員 マリ クリスティーナ
委員 宮城 聡
委員 山本 昌邦
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 報 告 第1回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 意見交換 社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励
(子供たちが文化・芸術・スポーツに触れる機会の創出)
- (3) そ の 他

【開 会】

事務局： ただいまから第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めます文化・観光部総合教育局の長澤と申します。よろしく願いいたします。

本日は、清宮委員、竹原委員、藪田委員、渡部清花委員が所用のため欠席となっております。

また、加藤百合子様でございますが、7月31日付で県教育委員に就任され、当委員会の委員を退任し、新たに豊田由美様に委員に御就任いただいたことを御報告いたします。

なお、豊田委員、藤田委員におかれましては、所用により途中で退席される予定となっております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶を申し上げます。

川 勝 知 事： どうも皆様方、9月に入りまして朝夕は大分涼しくなりましたけれども、今日は日中から少し蒸し暑い中、お越しいただきまして、誠にありがとうございます。

また、山本委員、豊田委員、今年からお入りいただきまして、誠にありがとうございます。

この「人づくり・学校づくり」実践委員会というのは、今年度は2回目ですけれども、実はもう今年で3年目に入っています。その前に検討委員会というのがありまして、その意味で4年目に入っているわけですけれども、一貫して委員長を務めていただいているのが矢野さんでございまして、元東芝ヨーロッパあるいは中日本高速道路のトップをお務めになられた民間のいわば「人事の矢野」と言われて、今はいろいろな審議委員会の委員もされておられる立派な方でございます。

この委員会はとても重要でありまして、繰り返し申し上げますけれども、総合教育会議という法律で定められたものがございます。

教育委員会はいわば政治から独立した、言ってみれば鎖国的なところがありまして、これは政治からの中立性、継続性、安定性ということを担保するために、戦後の教育委員会の基本になっているものです。

そうした中に、しかしながら弊害も出てきましたので、社会全体で子供たちを教育しよう、地域ぐるみでやっというこ、首長が教育委員会に入ることになりまして、それが総合教育会議です。

首長と言ってもピンキリでありまして、私みたいにかなり偏見のある者もおりますので、それをいかにしてなくすかというために、この静岡県下を中心に代表的な各界のトップにお入りいただきまして、そしてそこでの意見を私がしっかり拝聴いたしまして、それをこの総合教育会議に持っていきまして、総合教育会議で私が勝手なことを言わないように、場合によっては委員長あるいは副委員長のどちらかが同席あそばされて、実はそういう方もお招きしていいということになっておりますので、そこでこちらでの意見を正確に向こうにお伝えして、そして総合教育会議で決めていただいたことが、これが静岡県全体の教育指針になると、こういうシステムになっておりますので、繰り返しになりますけれども、その重要性をしっかりと御留意賜ればと存じます。

前回、7月7日に総合教育会議がございました。知性を高める教育というか座学ともう一つ、技芸を磨く実学と。技芸というのは、今日は農業や生産業の方が来ていらっしゃるけれども、ピアノ、あるいはスポーツ、あるいは演劇と、そうしたものが全部入った考えでしっかりと学んでいくということも、あるいは藤井聡太君のような将棋

も入っています。もう15歳で立派な大人、立派な一人前になれるということでございまして、そういう技芸を磨くことも人生を生きる道の一つだということで、技芸を磨く実学をどうしたらいいのかということで、前回意見を承りまして、第1回実践委員会でいただいた意見、例えば、実学の奨励に活用可能な施設や人材などの地域資源のリスト化・見える化、それからまた学校と地域・企業等を結ぶコーディネーターの充実などを、私が総合教育会議で教育委員会に申し上げました。また、その日には池上副委員長に御同席いただきました。

本日のテーマは、「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励」のうち、「子供たちが文化・芸術・スポーツに触れる機会の創出」についてであります。

最近では、演劇の宮城聡監督のところで、アヴィニョンで初めてオープニングの演劇を披露されまして、しかもギリシャ悲劇をなされまして、スタンディングオベーションを受けたというのは記憶に新しいところであります。

あるいは、飯塚翔太君が、リオでの銀メダルがありましたが、今回、世界陸上選手権で、400メートルリレーで銅メダルに入られたとか、あるいは橋本選手が世界柔道でメダルをとられました。

日本一はもういっぱいあるのですよ。世界クラスしか狙わない。

富士山、お茶畑は、世界クラスです。富士山が世界文化遺産になったのは平成25年6月。以来、こだまやひかりに乗る人が増えまして、そして一昨年は1億5,000万の人がここへ来られました。昨年は1億五千数百万の人、日本の人口をはるかに上回る人がこちらに来られて、そしていろいろなものを見ていかれるうちに、何と今は59件です。世界クラスの地域資源・人材が、平成25年6月から今月まで、ちょうど4年と4カ月で59件、要するに1カ月に1件以上の割合で世界クラスの認定をされているのが静岡県であります。

そういう意味で、我々は常に、世界のどこに出しても恥ずかしくないような青少年を育て上げていきたいと思っておりますので、本日はどうぞよろしく、時間の許す限り御議論を賜ればと存じます。よろしく願いを申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

次に、初めて実践委員会に御出席いただく委員の皆様から御挨拶をいただきます。

初めに、豊田委員、よろしく願いいたします。

豊田委員： 皆様、こんにちは。

富士市から参りました豊田由美です。

農家民宿というものをやっております、ベースは農業なのですがけれども、ソフトな部分を生かしてビジネスができないだろうかというところ

ろで、農業体験、それから農業を通じてビジネスを行っております。

また、同じ敷地内に、2年ほど前から農福連携ということで、障害者施設も立ち上げておりました、今、11名の利用者さん、障害を持った方が、農業という仕事をしながら、自立を目指すような、そしてまた地域の農家さんの高齢化を障害者の方が支えていくような仕組みづくりができないだろうかという形で、本当に農業ベースでいろいろなことを目指しております。

個人的には、子供が2人おりました、長男が今大学3年生、娘が今年から専門学校に行き始めたところで、子育て真っ最中でもございますので、私自身にとっても興味のあるテーマでお声をかけていただきまして、何かお力になればと思っておりますので、どうぞ皆様よろしくお願いいたします。

事務局： ありがとうございます。
次に、山本委員、お願いいたします。

山本委員： 山本です。

静岡県サッカー協会の副会長という立場でこちらに参加をさせていただいておりますけれども、日本サッカー協会の副技術委員長という立場でもあります。

先日、ワールドカップ・ロシア大会への出場が決まりまして、6大会連続ということになります。これも急にワールドカップに行けるようになったわけではなくて、1995年に初めてアジアの予選を20歳以下の子供たちが突破しまして、中田英寿たちの世代なのです。彼らが96年のアトランタオリンピックの予選も突破し、そして98年のワールドカップに行ったのです。

急にワールドカップに行けたわけではなくて、子供たちをしっかりと育てた結果、ワールドカップに行けるようになったということでしょう、やはり人を育てない限り未来はないと思っています。近道は人を育てることだと思っておりますので、もっと下の子供たちから育てていく必要があると思っております。

実はアスクラロ沼津の会長という立場もありまして、サッカー中心なのですけれども、子供たちが2,000人おりました、チアとか、新体操とか、テニスとか、東レさんのバレーともコラボさせてやらせて、教室も開いています。地域の子供たちをしっかりと育てることで、子供たちの可能性は間違いなくあがると思っています。

僕は静岡のポテンシャルを信じています。東京から近い環境など、いろいろな意味で世界を常を感じられるところにいると思っていますので、川勝知事がおっしゃったように、日本ではなくて世界を目指すことで、日本で勝つのが当たり前というような、そういう雰囲気のある静岡県になっていったらと思っています。

スポーツのことしかわかりませんので、スポーツ以外のことで何が伝えられるかわかりませんが、しっかりと頑張りたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

それでは、議事に入りたいと思います。

これからの議事進行は、矢野委員長にお願いいたします。よろしく申し上げます。

矢野委員長： それでは、早速議事に入りたいと思います。

本日は御多忙のところ、皆様、御出席くださりまして、ありがとうございました。

豊田さん、山本さんと御一緒させていただけることを大変光栄に思います。どうぞ遠慮なく御発言をいただきたいと思います。よろしく申し上げます。

それでは、次第に従いまして進めてまいります。

まずは、第1回静岡県総合教育会議の開催結果についてでございます。

7月7日に開かれまして、池上副委員長にこの委員会を代表して御出席いただきましたので、当日の論議の内容につきまして、副委員長からお話をいただきたいと思います。

池上副委員長： 池上でございます。

それでは5分ほど時間をいただいて、第1回総合教育会議の内容について、皆様と共有したいと思います。

本日の資料の1ページ、「資料1 平成29年度第1回静岡県総合教育会議開催結果」という資料を御覧ください。

その「4 議事」というところにあるとおり、第1回の総合教育会議では、「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励」という大きなテーマのうち、「子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出」について協議しました。

この論点について、委員の皆様からいただいた御意見を実践委員会の意見としてまとめて、総合教育会議に提出しました。その資料が2ページから5ページまでになります。

2ページから5ページまで、特に2ページは、論点として、教育現場でのプロフェッショナル人材の活用及び子供たちが仕事の現場を体験する機会の充実についてまとまっています。これは、前回の実践委員会では2つの論点に分かれていたものを、総合教育会議では1つにまとめてあります。

皆様からいただいた意見が3ページから5ページまでになります。

今日御覧いただいている資料ですと、皆様の御意見の後ろの

(××委員)ということでお名前が入っていますけれども、当日の総合教育会議の資料では、御発言内容はそのままですが、委員の皆様のお名前は記されていないものが配付されました。

もちろんその意見全部を読み上げて紹介することはできませんので、それをもとに私から実践委員会の意見ということでお話をいたしました。

私からの報告を受けて、出席者である教育委員の皆様からいただいた御意見が1ページ目の中段にある「5 出席者発言要旨(抜粋)」というところになります。

では、これから「5 出席者発言要旨(抜粋)」について紹介していきます。

まず、子供たちの印象に残る職場見学にするにはどうしたらいいかということで、単に製造現場を見るだけではなくて、例えば開発の過程など、子供たちに夢を与えるようなものを見せていただくとよいのではないかという御意見がありました。県内の企業博物館の活用に取り組む必要があるという意見もありました。

また、地域の人材や資源をより効果的に活用するために、経済界から学校現場へ派遣できる制度はとても重要であるという意見がありました。それは私たちの委員会が出た御意見だったのですけれども、それに対する賛同の発言があったということです。

次に、地域スポーツクラブを応用して、ものづくりをやりたい中学生を集めて、地域の人に指導を受けるものづくり部活ができないかという御意見がありました。

地域の方に学校に来ていただいて、高いレベルの職業体験を受けるために、その学校に応じた設備やシステムの充実が大事だという御意見もいただきました。

次に、地域に応じたキャリア教育をコーディネートするという一方で、そのコーディネーターを育成するカリキュラムというのも大事なのではないかという意見がありました。前回の私たちの会議でも、様々な地域資源と学校のニーズ、それを子供たちの発達段階に合わせてコーディネートしていくというのは、学校の先生方だけではなかなか忙しく、またノウハウもなく、難しいだろうという意見がありました。そこにコーディネーターが介在することで、非常に有効な提供ができるのではないかという御意見がありました。そこに対する支持の発言をいただいたということです。

次に、学校本来の業務が多くある中で実学の奨励を進めるために、教育産業等のプロのサービスを積極的に利用していく体制が必要だろうという御意見がありました。これは、必ずしもプロのサービスだけがいいというわけではないと思いますけれども、先ほど申し上げたコーディネート的な機能を、外部のものを求めて、学校と地域をつなぐ部分をしっかりと体系的に充実することが大事なのではないかという発

言で、根っこは通じていると思います。

次に、農繁期に農業の方と農業を学んでいる子供たちが接する機会を単位として認めるようなことが必要ではないかという意見を紹介します。つまり、外での活動を学びに結び付ける工夫の可能性を感じたという御意見もいただきました。

以上のような意見を主な意見として紹介しましたが、他にも多々ございますので、5番のところをまた後でお読みいただければと思います。

会議全体を通じて、教育委員の皆様にはこの実践委員会の意見を受けとめていただいて、基本的には同じ方向性を共有することができたという印象を持ちました。

こういった議論を経て、今皆様に御覧いただいている1ページの一番下、「6 知事総括」というところになりますけれども、具現化に向けて時間を要するものもあるけれども、できることから実践していきたいという御発言をいただきました。

以上が、簡単ではございますが、第1回総合教育会議の報告となります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

ただいまの御報告、それから前回のこの会議での論議を振り返って、なお追加の御意見があれば出していただきたいと思います。また、総合教育会議の模様についても、何か御質問や御意見があればお出しいただきたいと思います。

どうぞ、杉さん。

杉委員： 元商工会議所連合会の専務をしておりました杉と申します。

今、池上先生からお話をいただいた中のコーディネーターが必要だということですが、私、前回の委員会の後、商業高校、工業高校、農業高校でどのようなインターンシップを行っているかを調べてみました。

各学校が工夫をして、自分たちの学校、または先輩などの伝手をたどりながら、約1割から2割ぐらいの生徒に体験を、商業は地域のお店で販売経験をしたり、農業はJAさんを頼って製造現場に入ったりしていました。それから工業では、浜松工業、浜松城北、浜松湖北など3つの学校で希望者を募って、1年生約360人の中の42人という限られた人数ですけれども、信用金庫さんが紹介してくれた企業12社へ、バスを仕立てて回っています。

私が何を言いたいかと言いますと、これは希望者なのです。希望者の多くは進学ではなくて働く人であろうと思うのですが、進学する人も、いつかは働くことになりますので、できるだけこういう経験をして欲しいと思います。

そして、より多くの方がインターンシップを経験するとなると、先生

が1人や2人では対応し切れない。このときに先ほど出ましたコーディネーターですけれども、各学校が自力でやるだけでなく、何か一つワンストップで受けてくれるとありがたいと思います。どこか、県庁の中にでも一つセクションを置いて、そこに期間限定で、商工会議所や金融機関、学校のOBなど、いろいろな人を入れて、そこに連絡すると、実のあるインターンシップの道が開け、大勢の人を送り込める、何かそんなものができるといいなと思いました。

矢野委員長： ありがとうございます。

インターンシップが行われるようになって随分長くなりますが、本当に実のあるものにするにはどうしたらいいかということだと思います。

ただいまのお話は、民間企業からも人を出すし、協力する体制が十分あるというお話ですので、何かそういう点でいろいろ具体的な道が開けてくるのではないのでしょうか。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

埴先生、どうぞ。

埴委員： 今のお話を伺ってしまして、特に職業体験等については、実業系の学校が中心なのです。それが一番の問題だと思います。何で普通科や理数科や英数科がやらないのかと。

これからの地域を考える上でも、やはり地域を巻き込んで、そうした活動はやっていかないとまずいと思います。そこで詰めまで行かなくても、大学に進学した後、より具体的、実践的なものに組み替えていけばいいのです。

私どもの学校では、昨年からローカルな部分を手がけております。年間通して180分かける11回と、かなり時間をとられますけれども、地域課題の拾い出しや解決、そして資金調達から起業に至るまでのシミュレーションなど、先生たちも考えてずっとやっております。

地域と一体になって動けるということもあって、これは非常にいいことだと思います。グローバル化、グローバル化と言っていますが、グローバル人材だけではどうしようもないのです。地域が崩壊してしまうという現実が、やはり子供たちの未来に関わってくるのです。

教育現場としては当然なのですけれども、子供たちの20年後、30年後に責任ある教育をしていかなければまずい。地域が消えてしまうというのは、非常に具合が悪いです。グローバル化は、人と情報機器等の導入でどんどん進歩をしております。

教育現場がそれを追いかける必要はないのかなあというふうにされております。留学生の受け入れや、あるいはもちろん海外に出ていくこともありますが、交流事業を促進するだけで、随分子供たちは変わってきます。そんな中で一番大事なのは、やはり足元をもう一回見直すということだと思います。

また、地域と高校と一緒に活動できるということが、これからは必要だと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。
ほかにいかがでしょうか。
どうぞ、マリさん。

マリ・クリスティーヌ委員： 今の話にしつながらなのですが、グローバリズムとローカリズムということで議論がされるようになって、グローバリストかローカリストかとよく昔日本で言っていました。

グローバルと言いまして、非常に欲張った、ローカルでありながらグローバルであるというのは、じゃあどっちなのと思いますけれども、ローカリストでありながらグローバリストであることはできるのです。ローカルの中で自分たちを究めることによって、やはりグローバル的な視野を持てる。それで、グローバリストとして、世界のことに目を向けているのですけれども、自分たちが住んでいる地域をよくすることが、むしろ世界のためになるという視点がすごく欠けているような気がします。

今おっしゃった自分たちの足元は何なのかということを考えるときに、私、昨日も松崎町に行っていたのですけれども、今、桑を育てていて、最初の第一歩は地域の方々が頑張ってやってこられて、一つ確立したところで、今は自治体からいろいろ支援してもらっているのです。

松崎だけではなくて、ローカルに住んでいる子供たちの働く場所になり得るような、いろいろな産業が地域にあると思うのです。ただ、そういうところに加わるチャンスがないというのは、情報が出ていないということと、こういう手伝いが必要なのだということが知られていないからだと思います。

アメリカの話をしみますと、マクドナルドがハイリスクチルドレンのためのアルバイト先として使われているのです。ハイリスクとは何かというと、ぐれていく子供たちや、この子はいずれ大学には行かないだろうと、高校さえ卒業してくれれば仕事ができるようになるという子供たちです。

けれども、一人一人には光るものがあるわけですから、マクドナルドで働きながら、責任をだんだん自分で積み重ねていって、地域のマネジャーになることもあるわけで、必ずしもみんなが大学に行かなければいけないという考えではなく、自分がやりたいこと、自分ができることと、リアリスティックに考えることがすごく重要なのです。

いろいろな職場の体験ができることが大事なので、中学や高校から地元でアルバイトをさせてもらえるようなお店が周りであれば、そういうところも学校の中にカリキュラムとして取り込んでいただきたいと思います。アルバイトをして、お金をもらって終わりではなく

て、ここまでしっかりできれば、先生もそこを見てくれて、それで単位を差上げると。

地域の中の教育には、そういう地元の産業との連動性があることがすごく重要ではないかと思うので、是非静岡県がそういうことをほかの地域より早くに頑張ってもらっていただけるといいと思います。

矢野委員長： お手伝いといいますか、アルバイトといいますか、その報酬として、お金もありますけれども、単位をもらえるのが一番大きな報酬かもしれませんね。

そういう制度は実現可能なのでしょうか。

アイデアとしては、前にも出てきたことがあるのですが、大学については、地域貢献という形で、どういう内容になるかは別にして、それを単位にしようという意見がありましたね。

中学校、高校では、単位にするということはあるのでしょうか。

埴委員： 学校教育法の中でなかなか難しい部分があると思います。

ただ、学校の中でできることはやらせたいと思います。やはり子供たちにあらゆる場と機会を提供することが大事です。

部活もそうですけれども、今、文化部も運動部も関係なく一つになれるという活動をしておりまして、地域もそれに巻き込むと。

例えば、吹奏楽部の定期演奏会にだんだん集まる方々が多くなってきて、運動部の連中にも見に行かせているのですが、そうしたら、今度は会場が確保できないとって騒ぎ出したのです。

それで、「学校教育法の中で、定期演奏会は年に1回と誰が決めた。何十回やってもいいじゃないか。」と言いまして、今年は複数回やりました。非常に盛況でした。そうした活動が大事だと思います。

学校が一つになっていけば、大会や試合があったときに、結果によって学校中が一喜一憂しています。暗くなったり、明るくなったり、非常に雰囲気がいいと思います。

今年の夏に運よく、まさかと思いますが甲子園に出場したのですが、笑い話になるかもしれませんが、表敬訪問ということで野球部の生徒が街中を歩いて、私も一緒に歩いて途中まで行ったのですが、それで学校に帰ったら、「おたくの野球部の生徒が街を歩きながらごみ……」と話があったものですから、ごみを捨てたかなと思ったのですが、ごみを拾いながら歩いていたそうです。

甲子園に行って、大阪の宿泊先のホテルの支配人さんから電話がかかってきて、「おたくの生徒さんたちは、毎日ホテル周辺の清掃活動をやっている。勝った負けたではなくて、それで十分じゃないか。」と。県内で同じ宿舎を使っているらしいのですが、そんな学校はかつてなかったと。これ自体がおかしいと思うのです。

子供たちは人間力が未完成で、人間の能力は本当にわからないもので

す。先ほど知事から飯塚翔太の話がありましたけれども、中学時代に全国で活躍するような能力はなかったです。高校1年は鳴かず飛ばず。高2は故障でほとんどだめです。高3になったら、突然能力が上がったのです。どうしても自分たち大人というのは、経験値で子供たちの能力を見てしまう。そのぐらい自分に自信を持っているのですけれども、本当にわかりません。

シンフォニエッタ静岡の芸術監督の指揮を担当している方は、それこそ音大に行ったわけでも芸大に行ったわけでもありません。

それから、私もここに中・高の校長として座っていますが、私、高校の授業は一回も受けたことはありません。高校の教育課程は、何とでもなるのです。独学でも、1日15時間ぐらい肉体労働をしても、何とでもなるのです。そういう意味では、もっともっと生き方を子供たちに教えてやる。

この間、基礎点検に行ってきた、「先生、ところで何の教科の先生でしたっけ。」と何人かに言われました。高校を出ていないものだから、物理でも、漢文でも、数学でも、地歴でも、英語でも教えていましたけれども、そんなものなのです。

それから、こんなのもいましたね。朝からラグビーをやって、ほかの競技もやって、その上画材道具を持って絵を描いて、それで夜は格闘技をやって、毎日深夜零時半から1時ぐらいに帰ってきて、今何をやっているかという、国立大学の医学部に入っていますとか、そういう人が出てくるのです。教育現場というのは、人間の能力を信じ切ってやっている。

何かに目覚めるという場面が必要なものですから、できる限り多くの場と機会を提供してやる。そして、一部の生徒だけが関わるのではなくて、全体が関わっていく。できれば地域も巻き込んでいく。これが理想ではないかと。なるべくそういう方向で努力はしているのですけれども、まだまだかなと思います。以上です。

矢野委員長： 皆様の御発言はヒントに満ちあふれているのですけれども、すぐに答えは出ませんが、今もお話があったように、どこかで目覚めるというときがありますね。それを教育の場でどれだけ増やせるかが大事だと思います。

最高の芸術に触れてはっと目が覚める、それはその子によってみんな違いますので、余り画一的にやるのはどうかと思いますが、画一的にやらないと基礎学力が上がらないところもあります。けれども、全部画一的だと人は伸びないのではないかという気もするし、この課題は、これからも先々ずっと議論をしていきますので、皆様、いろいろな角度から御発言をいただいて、それを静岡県の中の長い教育行政の中で実現していくようにしたいのではないかと思います。

先ほどお話があったグローバルの話ですけれども、あれを私が最初に

聞いたのはソニーの会長をやっていた盛田さんからです。「グローバルに考えて、ローカルに行動しよう。」と言ったのです。いい言葉で、素晴らしいと思いました。考えることは世界レベルで、でも行動するところは目の前の自分がやるということですね。まだ私が大分若い頃でしたが、素晴らしいことを言う人が世の中にいるのだなと思いました。

今の御指摘のお考えは、すごく大事なことです。

まとまりのない、まとめとも言えないものになってしまいましたけれども、今後の問題提起をいただいたと受け止めたいと思います。

次に、今日のテーマであります「社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励」、「文化・芸術・スポーツに触れる機会の創出」という副題がついておりますけれども、この点について、事務局から資料の御説明をお願いします。

事務局： 総合教育課の伏見と申します。よろしくお願ひいたします。

着座して御説明いたします。

お手元の資料の6ページを御覧ください。

資料2でございます。

はじめに、論点の背景について説明いたします。

本県の未来を担う有徳の人の育成を進めるに当たっては、英、数、国、理、社等の知性を高める学習だけでなく、小さな頃から、農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等の技芸を磨く実学に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がございます。

特に、子供たちの豊かな感性を育み、心身の健全な発達を促すためには、子供たちが幼少期から多彩で魅力ある文化・芸術に触れるとともに、スポーツに親しむことが重要です。

また、子供たちが自らの夢をかなえ、世界で活躍する芸術家やアスリートなどになるためには、子供たちの素質を見出し、個々の才能を開花させることが重要です。

そこで、本日は、資料の2の下の四角の囲いにございますとおり、学校の内外において、子供たちが、文化、芸術、スポーツに触れる機会をどのように充実させていくかにつきまして、御意見をいただければと存じます。

次に、資料の7ページを御覧ください。

資料3として、県教育振興基本計画における技芸を磨く実学の奨励に関連する施策と、その位置付けをまとめてございます。

次に、資料が変わりまして、別冊の参考資料を御覧ください。厚い資料でクリップ留めのものでございます。

1ページを御覧ください。

小・中学校の授業の実施状況について、まとめてございます。

まず、1は小学校、2は中学校の法定の標準授業時数でございます。各学校では、この標準授業時数を上回るように計画を立てて、授業を実施しております。文化、芸術、スポーツに関連する教科を太枠で囲んでございます。

次に、2ページを御覧ください。

本県の高等学校における技芸を磨く実学に関連する学科の設置状況について、まとめてございます。

芸術関係の学科を設置している高校が6校、体育関係の学科を設置している高校が1校ございます。

次に、3ページを御覧ください。

県内在住の満20歳以上の男女を対象にした文化に関する意識調査でございます。

なお、この参考資料に記載してある個々の調査の出典は、本資料の最後の37ページにまとめてございますので御参照ください。

3ページでございます。

3ページの1の(1)①にございますとおり、昨年1年間にテレビやインターネット等のメディアを通して文化・芸術を鑑賞したことがある人の割合は83.2%となっております。

次に、4ページを御覧ください。

(2)①にございますとおり、昨年1年間にホールや劇場等で直接文化、芸術を鑑賞したことがある人の割合は67.9%となっております。

次に、6ページを御覧ください。

(4)にございますとおり、文化に期待するものとして、「心の豊かさ」という回答が最も多くなっております。

次に、7ページを御覧ください。

(6)にございますとおり、子供たちが文化・芸術に親しむ機会を充実させるためには、「学校での芸術の鑑賞・体験教育を充実する」「子供たちが文化・芸術に参加・体験できるプログラムを設ける」という回答が多くなっております。

次に、8ページを御覧ください。

2(1)にございますとおり、県内在住の満18歳以上の男女を対象とした調査によれば、文化財に「とても関心がある」「どちらかといえば関心がある」を合わせて7割以上が「関心がある」と回答しております。

次に、9ページを御覧ください。

3(1)①にございますとおり、県内在住の満18歳以上の男女を対象とした調査によれば、昨年1年間にスポーツをしたことがある人の割合は80.2%となっております。

次に、10ページを御覧ください。

(3)にございますとおり、「中学校や高校における体育の授業が、その後の自分自身のスポーツの実施に影響を与えていると思うか」の間

いに対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて、5割弱が「そう思う」と回答しております。

次に、11ページを御覧ください。

4(1)にございますとおり、全国の10歳以上を対象とした調査によれば、10歳以上の小、中、高校生が、クラブ活動や部活を含め、授業以外に過去1年間にどのような種類の学習、自己啓発等を行っているかを見ますと、「芸術・文化」が、小学校では15.6%、中学校では20.6%、高校では19.9%となっております。

次に、14ページを御覧ください。

5にございますとおり、全国の公立の小、中、高校生を対象にした調査によれば、子供たちが得意な教科を見ますと、小学校、中学校では体育・保健体育が1位、高校生では芸術が1位となっており、文化、芸術、スポーツに関連する教科が得意であるという回答が多くなっております。

次に、15ページから25ページにかけては、今回の論点に関する県の取組事例についてまとめてございます。

このうち、学校における文化、芸術、スポーツに関する教育の取組について、詳しく説明をいたします。

26ページを御覧ください。

1にございますとおり、各学校では、音楽、美術、芸術、体育等の教科だけではなく、学校行事やホームルームの活動など、特別活動や部活動によりまして、子供たちが文化やスポーツに親しむ機会を設けております。

2を御覧ください。

各学校の教科における特徴的な取組事例をまとめてございます。

例えば、(1)の県立清水南高等学校中等部では、中高一貫教育により特別の教育課程を編成し、表現という教科を設け、身体表現、言語表現、音楽表現、造形表現を組み合わせた総合表現活動を通し、自分自身の思い、考え、個性等を伸び伸びと自由に表現できる生徒の育成と、他者との豊かなコミュニケーション活動に取り組んでおります。

次に、29ページを御覧ください。

3に特別活動の具体的な事例をまとめてございます。

例えば、中学校の学校行事として、グランシップや美術館等で音楽、絵画、彫刻等を鑑賞したり、中学校、高校の学校行事としてSPACの舞台を鑑賞したりする機会を設けております。

4は、県内の部活動の状況についてまとめてございます。

(1)には中学校、(2)には高等学校の過去4年間の運動部の部活動数・部員数の推移をまとめてございます。

次に、30ページを御覧ください。

(4)に高等学校の過去4年間の文化部の部活動数・部員数の推移をまとめてございます。

次に、31ページから33ページにかけては、字が細かくて申し訳ございませんが、平成28年度の部活動の種類ごとの設置数をまとめてございます。

34ページを御覧ください。

キャリア教育や文化・芸術活動における学校と地域連携事例について、いずれも文部科学大臣表彰を受賞した中学校の例をまとめてございます。

まず、左側の三島市立錦田中学校では、地域で活躍するプロスポーツ選手など幅広い職種の方に講師をお願いし、キャリア教育を行っております。

次に、富士宮市立富士根南中学校では、文化部の活躍の場を地域に積極的に設ける取組を行っております。

また、マリ委員から御紹介いただきました東京都江東区にございます第三砂町中学校では、茶道部が地元商店街の歩行者天国に出店し、地域の方々と交流する取組を行っております。

次に、35ページを御覧ください。

本年度以降に県内で開催される文化、芸術、スポーツに関連した国際的なイベントについてまとめてございます。

次に、36ページを御覧ください。

文化、芸術及びスポーツの分野での本県高校生の活躍の状況をまとめてございます。

最後に、机上に、参考といたしまして、10月14日にアクトシティ浜松で県内の実学系高等学校の活動内容を紹介するふじのくに実学チャレンジフェスタの開催の御案内、また、ピンク色の冊子で、J Aバンク静岡が県内農業系高等学校と農林大学校に研究助成をしていますJ Aバンク静岡アグリサポートプログラム担い手育成支援事業の研究成果報告の資料を配付していますので、御覧いただければと存じます。

以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

それでは皆様、ただいまの資料を参考にされながら、これからどうしていったらいいか御意見をいただきたいと思えます。

指名して申し訳ございませんが、最初に宮城さん、いかがでしょうか。

宮城委員： 先ほど知事からも紹介をいただいて恐縮いたしました。SPACが7月に第71回アヴィニョン演劇祭のオープニングに選ばれて、アヴィニョンの法王庁の中庭という2,000人入る会場なのですけれども、世界の一流劇団が集まるアヴィニョン演劇祭といっても、オープニングだけは今までヨーロッパの劇団しかやったことがなかったのです。

僕らが初日を上げた翌日のプレスの評論が40ぐらい出ていましたけれども、ドイツ語圏の新聞は軒並み、見出しが「アヴィニョン演劇祭、

日本語の演劇で開幕」と書かれていて、日本語の演劇でアヴィニョン演劇祭が開幕したということが、いかにヨーロッパ人にとってびっくりすることなのかということを表していたと思います。

フェスティバルのプログラムをする人たちにとって、アジアの劇団をオープニングに選んだというのは大変なプレッシャーだったと思います。英断だったと思いますが、僕らは何とか重責を果たせて、非常に好評を得まして、例えば、フランスの国营テレビで10分余りの番組を作ってもらうなど、非常に大きな反響を得ることができました。その後、各国から自分たちの国に来てくれというオファーもたくさんいただいております。

ちょうど僕は11年前にSPACに来たのですけれども、その2年目から中高生鑑賞事業というのを始めまして、中学生、高校生を招待することを始めたのです。そのアヴィニョンに出ていたメンバーのうち一番若い俳優2人は、その中高生鑑賞事業を高校生や中学生で見ることができた世代なのですね。

1人は、高校でSPACの芝居を見て、演劇を志して、東京の桐朋の演劇科に行って、その後、卒業してすぐにSPACのオーディションを受けて入ってきて、もう一人は、大学もSPACの芝居を見たいから、東京に行かずに静大を選んで、卒業してSPACのメンバーになっています。

その2人はちょうど今、小さなメンバーなのですけれども、9人ぐらいSPACから行って、ローザンヌでロミオとジュリエットをスイス人の演出家でやっているのですが、その主役をやっております。そういうふうにして、11年ですが、少しずつ人材が頭角を現してきたという実感がございます。

先ほど山本さんがおっしゃっていましたが、20年ぐらい経つとはっきりした形になってくるのかなと思っていて、これから、あとどれぐらいかわかりませんが、世界で活躍する舞台演出家の多くが、聞いてみると静岡県出身であるというようなことが実現するのも夢じゃないのではないかと考えております。

今日はペーパーも配らせていただいたのですが、それを読んでいただければと思いますけれども、ここに書いてあることで2つ特に強調させていただければと思うのが、1つは、とにかく、先ほどからお話があったように、機会、チャンスですね、機会というものをつくってあげる。

つまり、小、中、高、どの学校でも演劇という授業はほとんどないですよ。これは、今事務局の御説明を受けていても、芸術関係の授業といっても、音楽、美術は、ほとんど演劇には関係ない。最近、体育にダンスが入りましたけれども、演劇という授業はないので、やはり演劇に触れるためには芝居を観てもらわなくてははいけない。

努力して中学、高校に宣伝をさせていただいていますが、まだ全生徒

さんの半分ぐらいしかSPACの芝居を観に来られないのです。せっかく県立の劇場があるので、できることなら静岡県の中高生、ともかく一度は全員にSPACの芝居を観て欲しい。全員が観られるような仕組みをうまくつくっていただけないかというのが一つです。

静岡県の中学、高校に通っていたのに、とある人は観ていて、とある人は観られなかったというのは、やはり不公平だと思うので、偶然に今は左右されていると思うので、全員が観られるといいと思います。演劇というのは、本当にうっかりすると一生観ないで終わってしまうかもしれないものなのです。たった1回観たことで何かが開けるかもしれないと思っております。

それからもう一つ、できれば演劇科のある高校が、県立の中で一つ生まれるといいのではないかと思います。

先ほども、事務局からの説明にありましたが、清水南の中学のほうに表現という学科があります。しかし、清水南は、高校になるとそれがなくなってしまうのです。高校になったら美術か音楽になってしまって、せっかく中学で表現という学科を学んでも、演劇というのは選べないのです。そういう残念な状況ですので、何とか県内の高校で演劇科ができるといいと思っております。

私からは以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
どうぞ。

池上副委員長： 演劇つながりで発言をさせてください。

私は、北海道札幌の出身なのですが、たまたま私がいた小学校がそうだったのかもしれないけれども、何とその学校は、年に1回、10月だったと思いますが、1年1組から6年6組まで全てのクラスが演劇を発表する「劇の会」というイベントが毎年ありまして、例外なく全てのクラスが演劇、お芝居をやるという教育をやっていました。今でも私が小学校時代を振り返るときに、何よりも思い出すのはその「劇の会」なのです。

観に行くというのは物すごく大事なのですが、一方でみんなで作るという感覚も大事で、演劇というのを学校教育の場にもっと取り込むことで、子供たちの感性、あるいはチームワークなどを醸成できるのではないかと感じております。

そういう意味で言うと、宮城さんが今おっしゃったことの延長線上で、刺激を受けた子たちが、今度はそれを自分たちで実践してみるような機会にまで踏み込んで展開できると素晴らしいと思いました。以上です。

矢野委員長： 本当にそうですね。

ほかにいかがでしょうか。
どうぞ、加藤さん。

加藤委員： それでは、私も演劇つながりで。

私も名古屋のほうの小学校に行っていましたけれども、そこではクラスごとに英語と日本語、両方の演劇を必ずやらないといけませんでした。

矢野委員長： 小学校でですか。

加藤委員： はい。そういうのをやりました。

それから、私の娘が随分前に東京都立国際高校というところに行っていて、そこでもやはり全クラスが文化祭に向けて演劇をやらないといけなかったのです。それもお金をかけずに手作りです。例えば、「もののけ姫」では、オオカミみたいなものが最後に出てきますよね。その毛を使用したビデオテープを集めてやったり、古い布を使って作っていました。国際高校の演劇のレベルが高いと、劇団四季が見に来ていました。

その学校にはいじめもなかったし、それから20カ国位の人たちが一緒に共存する当時、唯一の公立の国際学科があるところだったのですが、その演劇以外にも、例えば、歌舞伎の役者を呼んできたり、能役者を呼んできたりして、日本理解という授業もありました。公立高校でもそういうことができるという一つの先駆的な例ではないかと思います。

私は、演劇の素晴らしさというのは、演じる人もすごく大事だと思いますが、それ以上に、例えば照明、大道具や小道具など、みんなで作り上げるチームワークだと思います。そこから学べるものがたくさんあります。特にいじめの問題を解決するために、演劇を公立学校の中で取り入れたらいいのではないのでしょうか。せっかく文化祭がどこの高校にもありますから、活用したらいいのではないのでしょうか。

宮城さんという国際的な第一人者がいらっしゃるのですから、静岡がリードして是非やっていただきたいと思います。

矢野委員長： どうぞ。

仲道委員： 私自身は中学生のときにアメリカのミシガン州に住んでおりました。その町はとても小さな6,000人ぐらいの町なのですが、中学校、高校が1つずつで、中学、高校とも、全校生徒が学校の授業の1時間を必ずブラスバンドか合唱をするという町でした。いろいろな肌の色の方が住んでいる社会の中で、それが街づくりに大きな役割を果たしていました。

また、ミシガン湖の五大湖のあたりは、この間のアメリカの大統領選

のときに隠れ票が集まったような非常に難しいエリアで、工場が閉鎖されて、軒並み経済はダウンしているのですけれども、その町は、今はミシガン州の中で一番訪れたい観光の町に変貌しているのです。そのように音楽と常に共にあった人たちの生きる力というものが何かの支えになっているのではないかと思います。

そのことに加えて、少し音楽の話をさせていただけたらと思います。

クラシック音楽は心が豊かになるからいいものだという事は、皆様に御理解いただいて、「そうだよ」と思ってくださいなのですが、それでも、「その力をもっと」と言ったときに、「いいものだけれども、それが経済につながらないから」と言われ続けてこの数十年でしたので、静岡県がそういった芸術の力と言ってくださいことは本当にありがたいことだと思います。

けれども、公共で何かをしていくというときに「心を豊かにするよ」と言うだけでは、やはり説得力が少ないというのも事実です。それで、音楽というものが学校の教育や地域の中に入って行く中で、今、どのようなことが行われているのかということと、どのようなことが問題になっているかという話をさせていただきます。

どのようなことが行われているのかと言いますと、鑑賞ということ、それから音楽を使ったアクティビティー、この2本が大きな柱になっています。

一つめの鑑賞が何をもたらしているのかと言いますと、決してクラシック音楽が好きな人を増やすためとか、それによって心が豊かになることだけを目指しているではありません。クラシック音楽を聞くということの中には様々な要素があり、200年も300年も前からの人々の生きることへの様々な思いや苦労がその音楽の中にあって、それを聞くことができます。

人は、自分の心の中の声やほかの人の考えを聞くとか、日本人は、ちょっとした葉っぱの動きから何かものの哀れを聞いたりするというような、そんな感覚を持っています。聞くということがないとコミュニケーションが始まらない。自分を主張するだけではコミュニケーションにならない。人の話を聞く、聞くことができる人をつくるということ、クラシック音楽からもたらすことができる。だから、クラシック音楽は深い意味を持つのです。

もう一つの音楽を使ったワークショップ、アクティビティーというのは、コミュニケーション、自己実現、自己啓発、他者理解、様々な方面で非常に効果があるとして、今、各地で盛んになってきていて、その手法も開発され始めています。実際、イギリスやアメリカの研究ですと、そういった音楽教育を学校教育に取り入れた結果、学業の成績が伸びているという結果も出ています。

それでは、問題点は何かと言いますと、教育現場にそういった芸術が入ること、すなわち、アーティストが学校教育の中に入って行くこと

の意味をしっかりと理解した現場をどのように醸成できるかということなのです。

様々なアーティストが学校教育に入っていく、どのようなプログラムを行っているのか、そのプログラムがどのような効果をもたらしているのかをどのように検証するのもまだ確立されていません。どんなことでも1回行えば、この自治体ではこれを1回しました、2回しました、3回しましたという数の成果で勘定されてしまう。それで果たしているのかという問題に当たります。

何が大切かと言えば、何のためにそれを行うのかということなのです。様々なジャンルがあると思いますけれども、ジャンルによって獲得できる効果は違っているのだと思います。目指すものが曖昧だと、いろいろやったとしても、それが何だったのかということが見えにくくなってしまいます。

音楽が学校教育の中に入っていくときに考えさせられるのは、教育の公共性ということなのです。公共性とは何かというと、全ての人に等しくあることが公共性ではなくて、それは幻想でしかないということは、私たちはわかっていることです。では、その中で何を芸術がもたらすかということ、研究によると代替不可能性ということなのだそうです。

代替不可能性というのは、「表現、あなたでしかできない表現があります。」、「思考、あなただからこのように考えることができるのです。」、それから「存在、あなたはそこにいていいのです。あなたの存在はほかの人と違うけれども、あなたの存在は大切なのです。」ということです。それを芸術はもたらすことができると。それこそが教育のミッションであり、教育の公共性につながることはないかと思います。

ですから、この議論の中で、様々なジャンルがありますけれども、目指すべきはそこではないかと思います。常に教育の公共性とは何か、それと照らし合わせて、何になるのかということを考えていかなければなりません。それが多様性と公共性のあり方が合致できるポイントになるのではないかと思います。以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

大変深いお話だと思います。今、演劇と音楽の話が出たわけですけど、ほかにいかがでしょうか。

どうぞ、藤田さん。

藤田委員： 今日のテーマで、芸術に触れる機会をどのように充実させていくかという関係があったと思いますが、今、こうして皆様のお話を伺っていて、逆に、今までどうして充実させてこなかったのかという視点から考えてみたいと思います。

私が思うに、教育現場を預かっていらっしゃる先生や親も含めてですけれども、今、仲道さんのお話を伺っていて、素晴らしいことをおっしゃっているなと思ったのが、親や先生が本当に「ああ、こんなお話を子供に聞かせたい」と思えば、それをプログラムに入れようと思うかもしれないし、もっと実学で経験して学ぼうと思ったりすると思います。

根本の仕組みとして何とかするというのももちろんそうなのですが、意識として教員の教育や親学の中でのレベルをもっと上げていくということもとても大事だと思いました。

そういう意味で、例えば今この資料の中で、「なぜ昨年、鑑賞に出かけなかったのか」という理由の一つに、「公演や展覧会などの情報が得にくい」とか、「魅力ある公演や展覧会等が少ない」と書いてあります。

実は魅力のあるものがあるのに、こういう理由を付けて行かないようにしてしまっている気がして、若しくは目を向けていないから情報が少ないと思うのではないかと。情報が得にくいというのは、興味がなければそれを取りにも行かないと思います。

それを逆に仕組みで解決するとしたら、今、これだけネットがつながっているのに、親御さんたちにSPACのこんな劇がありますというのを、子供にチラシを渡して、それをお父さん、お母さんに渡してというレベルではなく、直接、親に飛ぶようにしてみるなど、そういう仕組みも情報の共有として考える必要があるのではないかと思います。

それから、吉田町の夏休みが短くなるという話がありますけれども、先ほどの情報の一つとして、静岡では、一昨年仲道さんも講師をやられている「ふじのくに子ども芸術大学」というとても素晴らしいプログラムがあると思うのですが、これもどこまで親御さんたちに届いているのか。あんなに素晴らしい講師陣がいて、それをグランシップや浜松アクティシティでやっている機会があるのに、それが届いていないだけなのではないかと思います。

私ももともとビールメーカーで働いていたことがありまして、「いいものだ、いいものだ」と言っても、結局それが消費者のもとに届かなければいいものではなくて、やはり届いて初めてそこでいいものを感じてもらえますので、情報を共有していく、情報を伝えること、今あるものをどう生かすかということも今一度考えるべきではないかと思います。

仲道さんの話ばかりで申し訳ないのですが、サントリーホールで開かれたコンサートにこの間お邪魔したのですが、皇太子がお成りになるようなコンサートを開かれている仲道さんのお話や演奏を聞けることがどれぐらい素晴らしいことで、また静岡県の財産であり、今日、ここでお話ができることが本当に素晴らしいことなのに、

みんなそれを知らなかったり、情報を知らなかったりするがために、とてももったいないことをしているのではないかと思うので、もっともっとそういう経験を生かして、夏休みの中で子ども芸術大学のようないろいろなプログラムを、今あるものを使って子供たちに経験させていくことを今一度考えられるのがいいのではないかと思います、発言をさせていただきました。

矢野委員長：　そうですね。大変重要な御指摘だと思います。ありがとうございました。

宮城さん、一つ質問いたしますが、芸術科を高校につくるとして、先生はどうなるのでしょうか。

宮城委員：　SPACがたまたま静岡にはありますが、実演家という意味では、ほかの県では全くあり得ないと思います。静岡の場合、実演家はたくさんSPACにいます。俳優だけでも30人余りいて、そのほかに、さっきお話があったように、いろいろ裏方が必要だというのが演劇の面白いところで、もっと単純に言うと、人前に出るのが苦手という人でも演劇では結構チャンスがあるのです。

そういう意味では、裏方や制作というプロデュースなどをやっているプロがこれだけの人数集まっているところというのは他県にはないので、実際に携わっている人たちを講師に呼ぶ分には、静岡の場合は非常に人材がいると。ただ、先生のほうに御理解が必要だというのは、全くそのとおりですね。

案外、高校の先生の中で演劇に専門性を持っていらっしゃる先生というのは数少ないようで、全国に演劇科のある高校は幾つかあるのですけれども、引き抜きというのでしょうか、人材が随分流動しています。「あの先生、今度、あっちへ行っちゃったんだ」みたいなことが起こっております。

ですので、その部分は確かにそう簡単に見つからないのかもしれませんが、例えば、仮に演劇科をつくるのが何年後かというような話になった場合には、その何年かをかけて、その候補の方とSPACが一生懸命話し合いをしていけば、いろいろワークショップを工夫してつくっていくとか、そういう準備期間があれば大丈夫なのではないかと思っております。

矢野委員長：　ありがとうございます。

なぜこういう質問をしたかと申しますと、これは仲道さんの御指摘のことと関係するのですけれども、資料の26、27ページに載っている清水南高校、それから中等部、これは中高一貫教育をやっている学校なのですが、高校には芸術科があって、音楽専攻と美術専攻科があるのです。

先日、実は学校見学に行ってきたまして、授業を見てきたのですが、音楽専攻と美術専攻には、それぞれ専任の先生が3人ずついるのです。それ以外に、教師の免許を持っているのかどうかはわかりませんが、非常勤の専門家の方が、音楽であれば楽器ごとにいらっしゃって、全部で20人ぐらいいるのです。その方がほとんどマンツーマンで生徒たちを教育しておりまして、本当に驚きました。

それから、もっと驚いたことが、県立の中高一貫校は静岡県で2つあるのですけれども、中学生、高校生が一緒になってクラブ活動としてクラシックのオーケストラをやっておりまして、本当に珍しい素晴らしい学校だと思いました。クラブの部員が、78人いると言っていました。

私も練習風景を見させていただいたのですが、本当に素晴らしかったです。中学には芸術科はありませんので、その78人のうち「高校の音楽科の将来プロを目指す子たちが何人いますか」と聞いたら、たった2人なのです。芸術科の子たちはみんな芸術大学とか音大に行って、本当にプロを目指しているわけですが、オーケストラの78人の大部分の生徒たちは専門家を目指すのではなくて素人なのです。それほど多くない人数の学校で、それだけのクラブ活動が行われていることは、本当に素晴らしいと思いました。しばらくそこに座り込んで、とても良かったです。ですから、学校自体がとても良い雰囲気になっていて、すごいなと思いました。

ちょうどいい機会なので御紹介しますと、清水南中・高は中高一貫教育であるということと、芸術科を持っている珍しい学校だということと、もう一つ、ICTの教育がすごく進んでいるのです。iPadをたくさん用意して、先生も子供たちもそれを活用して勉強しているのです。

「先生の負担が増えて大変ではないのか」という質問を、私ではなくて同行の方がしたのですけれども、責任者の先生が、「最初は大変です。特にあまりICT教育が熱心ではない学校から転勤してこられた先生の教育に時間がかかります」とおっしゃっていました。「でも、すぐに慣れます」というのです。これは年齢と逆比例するのではないかと思いますけれども。

実際にICTを活用するとどうなるかというと、仕事がすごく楽になるそうです。そこで作った資料は後でも使えるし、皆の情報の共有化もできるし、先生の本来の負担が減ってとてもいいということでした。

ですから、芸術とICT、両方とももっと進めたらいいのではないかと思います。

それから、中高一貫教育の面でいうと、同じフロアに中1、中2がいて、別の同じフロアに中3、高1がいて、もう一つの別のフロアに高2、高3がいるのです。運動会を一緒にやりますから、中1の男の子が高3の女の子に手を引かれて一生懸命やるわけです。運動会を見た

わけではありませんけれども、雰囲気を見ていると素晴らしいと思いました。

こういう特徴のある先進的な教育が静岡で行われているというのは、すごいことだと思います。

宮城さんの「高校に演劇科を設けたらどうか」という御発言を伺って、すぐ先日見てきたばかりの学校を思い出しまして、そういうものができたらいいと思います。

あまり委員長が発言してはいけないので、御勘弁いただきますが、仲道さんの話に刺激されたものですから、申し上げた次第です。

渡邊さん、美術や工芸の面では、いかがでしょうか。

渡 邊 委 員： 美術で地域の特徴を生かすというのはなかなか現実に難しい話でして、どうまとめたらいいか自分でも少し迷うところですけども、美術館というのは、場所が決まっています動くことができない。ですから、展示する資料をいろいろとほかから持ってきて展示するのですが、展示する場合に、ある期間しか展示できない。その期間内にどれだけその地域ないしはその地域外からこの地域に人を集めるかということなのです。

終わったばかりですけども、大人の方はほとんど御存じないと思いますが、ミロコマチコという30代ぐらいの天才絵本作家で、いろいろな展覧会や審査みたいなものを総なめにするような細身の小さな女の人のんですけども、その描いた絵が物すごいのです。

大きな熊を画板いっぱい描いて、のっしのっしと歩く姿を描いたりして、まだ4歳、5歳ぐらいの子供たちが母親、父親に連れてこられていっぱい入ってくるのです。大人よりも子供が見ていると喜んで見ているのです。絵本で子供が見てあんなに喜ぶ絵というのを、私、初めて見たのですけれども、うちではあれを選択するのにかなり考えたのですが、今までやった絵本作家で2番目ぐらいに人が入りまして、子供たちは一番入りました。

子供たちが会場の中で喜んでる姿を初めて見ましたけれども、まだ小学校に入る前ぐらいの子供にせがまれて、親があれもあれもと絵本を買って抱えて帰るのです。

私などが見ると、大人の描いた猫というのは、目が猫の目ではなくて人間の目になっているのですけれども、そのミロコマチコさんの描いたものは、象を描いても、熊を描いても、猫を描いても、動物の目なのです。やはりそういう感性なのだろうと思います。

この展覧会をやってよかったと思いますけれども、そのときに思いましたのは、美術館がいい企画をするのは一つの役目ですけども、どのように広報して、どのように人に情報を流すか、それはものすごく大きな仕事なのです。

今、それをもっと研究しようと思っているのですが、今、ネットでみ

んな見れますけれども、ネットに情報をただ流せばわかるのではなくて、ネットへの流し方というのがあるのです。

例えば、大阪のある方なのですけれども、日本刀のコレクターで、何万本もコレクションしている人がいるのです。その人が、「とにかく日本人、美術館も広報が下手だ」と。「大体、人に広報して教える、人に伝達しようという意識がない。自分の好きなものを展示して満足しているとはけしからん」と言うのです。

その人は会社の社長で、小さな会社なのですけれども、すごい業績を上げていて、世界的に有名な会社なのですが、彼が企画して50点とか100点ぐらいの展覧会をするとき、有名な品物二、三点ぐらいを2日しか展示しない。その2日だけを「これはその2日だけ展示するよ」と1カ月ぐらい前に広報して、その二、三点がどのぐらい良いものかをぼんぼんネットで流すのです。そして、ネットに流すときに、自分のネットを流すエリアから、ちょうど線香花火みたいに、情報を放すポイントをいっぱい全国に張っているのです。それで情報を流すと、初日に何万人と来るのです。

去年、佐野美術館も少しその真似をしまして、「初日に2点特別なものを出します、2日しか展示しません」と言ったら、初日にあんな小さなところに3,500人来ました。

人が全国から来て入れなくて、もう7時ぐらいから並んでいるので、10時のオープンを9時にして、1時間前に開館して、私たちは美術館全員で人を流す努力をしましたが、みんな見ているから動かない。全部日本刀なのですが動かない。それを動かさせ動かさせとやっとなんてやっとなんて、終わったのは19時半でした。

初日は3,500人、翌日は2,000人位で、その五千何百人が2日間で来たのです。その展覧会は1カ月位の展覧会なのですけれども、2万数千人が来ました。

そういう技術には余り感心しなかったのですが、その人に言われてやってみようと。そうするとその情報が流れて、少し変わった方々が見えて、「あなた、どこからお越し」と聞いたら「ソウルです」と、「あなたは」と聞いたら「香港です」と。そこから佐野美術館の展覧会を見るために飛行機で来ているのです。不思議な情報の世界だと思いました。

美術館を社会の中で経営している人間には想像が付かない話なのですけれども、ネットの社会というのは、現在、そういう特殊な技術が要るのだと思います。

みんなミーちゃん、ハーちゃんだろうと、そういう人を少し低く見る人もあるのですけれども、その中にはすごく感覚のいい人たちが結構いるのです。

数日前に、私が講演をすると、全国どこでも追っかけみたいに来る人がいるのですけれども、「私ね、初めて日本刀を買いました、見てく

ださい」と言うのです。女の子ですよ。「すごくいいのを買った。私の友だちはみんな買っています」と。よく理解できないところもあるのですけれども、質問することはもう素晴らしいセンスなのです。だから、日本刀は武器とか何とかということではなくて、芸術として日本刀のどこを見るかというのをちゃんと認識している人たちでした。

ですから、日本刀のコレクターというのはこうなのだと思います。全く違う世界の人たちが新しくカルティベートされてきている。

ですから、地域性と世界性の両方を加味していかないと、地域だけ考えても発展性はないし、広く広く考えて、でも広いだけではだめで、この地域に根差したもの、常に2極を考えながら一つの方法を開拓していけば、人を動かすエネルギーが出てくるということを教えられているのですけれども、まだまだこれからいっぱいそういう技術も学んでいかなければいけないと思っています。

矢野委員長： ありがとうございます。

静岡県人だけではなく、日本人全体が広報下手なのだと思います。なぜなのかについては、後で皆様の御意見を聞きたいのですが、その前に、今日のテーマの一つであるスポーツにつきまして、御意見をいただきたいと思います。

山本さん、いかがでしょうか。

山本委員： 文化、芸術、スポーツ、全て人の心を育てることができると思います。人の心を育てて、一流を目指すから皆が成長していく。誰もが成功できるわけではないのです。我々の世界は厳しい世界です。ただ、その厳しいところを目指すから成長する。

どの文化、芸術でもトップを目指すから、その過程で成長することがあると思いますので、そういう環境を提供するのは大事なことだと思います。

勉強ができることと仕事ができることとは少し違います。アドバンテージではありますけれども、勉強ができて仕事ができない人はいっぱいいて、だから、好きなこと、得意なこと、人よりうまくできることに人生のチャンスがあると思います。

僕もサッカーしかしたことがないのですけれども、来年60歳になりますが、人生ここまでサッカーを中心にやってきたということです。自分の意志でやる人しか成功はしないのです。やらされている人、見に行きなさいと言って連れて行かれて見に行くような人は、残念ながら成功は難しい。僕はそう思っています。渡邊委員のお話も、一流を目指すして自分の意志で海外からでも来るといのは、お金を使っても見たいから必死になって来るわけです。そういう自分の意志でやるというヒントを与えていくことが、指導者の資質として大事だと思います。

先ほど話が出た一貫教育、中学から高校の12歳から18歳の間に、16、

17歳でワールドカップという舞台のピッチに立つような選手がいるのです。エスパルスでもジュビロでも、17、18歳でJリーガーになる人はいます。この12歳から18歳の高校を出るまで、それでも遅いぐらいですけれども、この過程を一貫教育の中で無駄にしないということが大事です。

というのは、例えばサッカーで言うと、夏の中体連の大会が終わってから来年の4月まで、この6年間のうちの7カ月、8カ月をずっとぼーっとしていたら、世界には届きません。その時間を無駄にただけで、世界の頂点には近づけないです。17歳で世界の舞台に立つような選手が世界中にいるのです。そういう選手を育てていきたいと思いません。

小野伸二という沼津出身の選手がいますが、彼は18歳でワールドカップの舞台に立って、次の19歳のときに20歳以下の世界大会で世界2位になるのですけれども、その中心の選手として彼は余裕がありました。自信があるからです。そういうワールドカップを乗り越えたという自信が自分のプレーの自信になっていくわけですね。うまい人が勝てる世界ではないのです。自信のある人が勝てる。

だから自信がある人を育てる。要するに経験をさせて、プライドを身に付けさせて、「絶対負けるわけがない」という経験をさせなければいけないということです。先ほどの親の心得とか親の関わりが非常に重要です。

我々アスクラロでは、親の心得もちちゃんと持っています。親がどう関わるべきか。失敗したときに審判のせいにしてたり、周りのせいにしてたりする子が大きくなったら、常に都合の悪いことは周りのせいにする子になりますから、「勝ちたいのだったらもっと上手になりなさい」ということを親も言わないといけないし、それをみんな一体となつて、指導者、親も含めて一体となつてやらなければいけないのではないかと思います。

スポーツでは、高い指導力を持つ指導者の確保は絶対重要です。例えば、ワールドカップのロッカールームの中の厳しさを知っている人が教えたなら、「それはまだ足りないよ」と言えるのですけれども、それを「いいよ」と言って満足してしまう子は成長がないからです。

そういう人材をどうやって県で確保するのか。中高一貫でやれるような人材の確保は大事だと思います。

もう一つ、地域と連携したスポーツ活動の推進はすごく大事です。

というのは、子供たちが通える範囲が限られているからです。親元から通ったほうが親のサポートが受けられますし、いろいろな意味で精神的にもバランスがいいです。寮という選択肢もあるのですけれども、東中西でいうと静岡には各地域にサッカーのプロチームがあって、バレーボールもありますので、そういうものを地域ごとに活用していく連携ができれば、質が上げられると思います。

簡単に成功はしないと思いますので、モデル地区をつかって何かモデルができたなら、「ああいうふうにやったら、こんなに子供たちが育つのだよ」ということをわかりやすく示していけばいいと思います。

それには地域と企業のバックアップが必要です。磐田で成功しているのは、ヤマハがあるからだと思います。

音楽で言えば、ヤマハは楽器のほうもあるので、浜松に行くと何か音楽の薫りがするのです。僕はずっとヤマハにいたので、エレベーターも音楽の音符が描いてあるし、ホールも立派です。そういうことが20年後につながるような話だと思います。

3つ目は、トップスポーツクラブに所属する生徒の人材の支援です。

というのは、来月、17歳以下の世界大会がインドであるのですが、それに選ばれる子は学校を1カ月近く休まないといけないのです。そこには世界のトップ、バルセロナやリアル・マドリードなどの世界中のスカウトも来ています。18歳で世界のトップクラブへの移籍ができますので、そこからそのまま移籍する選手もいます。

そういう選手の学業の支援やコーディネートに、かなりスタッフが気を遣います。

一つ難しいところは、クラブの子は、例えば清水エスパルスでサッカーをやっている。だけど学校は学校で行っているのです。それで学校にお願いに行くと、「清水エスパルスの子で、学校の部活動とは関係ない」と言われてしまうと困ることもあります。

静岡県サッカー協会は、そのところはちゃんとやっていますので、静岡はそれほど問題はないです。でも全国に行くと、「何のために学校を休むのだ」と、「何の大会だ」と言われます。世界大会だという認識がないのです。その仕事がかかなりの重労働になったりします。

そこで、県の担当者が人材支援をしていただけると助かります。オランダなどは大会に先生がついてくるのです。試合はやっているのですが、空いた何時間かは先生が学校で代表チームの子供たちに勉強を教えています。そういうことも含めてやっていくと、バランスが取れるのではないかと思います。

今、「クラブがよくなった」、「多くなった」と言われていますが、絶対数でいくと実は部活の子がほとんどなのです。だから部活をどういうふうに活性化、強化していくかで、静岡のスポーツ全体をぐっと上げられるのではないかと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
ほかにいかがでしょうか。
はい、どうぞ。マリさん。

マリ・クリスティーヌ委員： 今回、こうやってアンケートを取られて、それでこういう結果が出たということはいいのですけれども、この結果をもとにして何をするのか

がもっと大事だと思います。

語学が好きな子供たちがたくさんいたり、芸術、文化、スポーツに非常に興味があったりということがわかった中で、こういう傾向だから学校に対してこうしていきましょう、地域はどうしていきましょうという話をもっとここで進めていかないと、このアンケートを取っただけで終わってしまうと思います。

もう一つ、今日、いろいろなお話を伺っていてももうおわかりだと思いますが、学校教育というものと、子供たちを育てていくということには、相当大きな溝があるような気がします。

というのは、教育者としての一つの職業というものがあるので、その職業の中で頑張ろうとすると、その子供を生かしてあげられる余裕がないということを話の中で何となく感じます。

なので、静岡県はどんな教育をしていくのかということで、先ほど矢野さんがお話しされていたような、とてもいい学校がたくさんある中で、それを模範にしてそちらの方へ引っ張っていくのか、それとも、「こういう学校が好きな人は、こちらへ行ってください」、「そういう学校が好きではない人は、こちらへ行ってください」ということになるのであれば、結局生活区域も変えなければいけないし、随分前から話していた、それこそサッカーチームの話で、その地域に部活がなくて別のクラブに入ると、結局その地域の代表になれなくて全国大会に出られないという、あれをどう解決したのか、まだ答えを聞いていないのですけれども。

矢野委員長： ラグビーはいろいろな学校が集まって、クラブチームとして出られるそうです。

マリ・クリスティーヌ委員： 出られるようになったのですね。
サッカーは、そうではないのですか。

矢野委員長： サッカーはどうでしょう。

山本委員： サッカーは登録チームで大会に出場します。

例えば、渋谷区の学校は区内であればどこに行ってもいいのです。学校の校長先生が社長とみなされていて、その社長が、「うちは全部、学校は英語でやります」と言ったら、松濤中学は全部英語で授業をやっていて、英語で勉強したい子はみんなそこに行く。部活支援学校と言われている代々木中学は部活にすごく力を入れるから、グラウンドも整備もされていて、そこに元気のいいスポーツが好きな子はみんな集まってくる。

そういう個性を生かすような流れをつくっていきまして、例えば小さな町とか市であれば、学校で「うちはこういうことに力を入れます」と

言ったら、競技レベルの高い子が集まって切磋琢磨しますよね。だからさらに伸びる。中3になったときに、自分が一番上手になってしまうと、何もしなくても一番上手だから努力しなくなるのですね。絶対に満足しないことは大切です。そういう環境をつくらないようにすることは、仕組みを変えればできます。先ほどの中高一貫のところと一緒にできるのではないかと思います。

矢野委員長： それなら道はありそうです。

マリ・クリスティーヌ委員： 静岡県の問題がどうなったかを聞きたかったのですが。

矢野委員長： 県というよりも、クラブチームが全国大会に出られるということは、道が開けているということですね。

マリ・クリスティーヌ委員： 開けたのですね。

矢野委員長： 県の行政という問題よりも、私もマリさんからの質問があって、ずっと気になっていまして、磐田のラグビーのクラブチームを視察したときに子供たちに聞いたら、「今度、全国大会があって、これに出るために、今、猛練習で頑張っています」と言っておりまして、ですから道はあるなと思いました。

それ以外の競技全体をどうするかまでは、まだ及んでいないのですけれども、全く道が閉ざされているわけではないというのはわかりましたので、またそれは前向きの検討課題になるのではないのでしょうか。

マリ・クリスティーヌ委員： その次なのですけれども、静岡県には富士山があるので、例えばいろいろなスポーツの中で選べるのもすごく大事ですけれども、私の娘がある私立学校へ行っていまして、小学校では沼津で必ず泳がなければいけないのです。赤いふんどしを女の子も着させられて、泳げないと達成できませんでしたという証書をもらえないのです。今、東京の学校が沼津までわざわざ来てそういうことをやっているの、静岡県全部の学校が必ず静岡の海で泳げるということの一つ目標にすれば、泳ぐことになるのではないですか。

もう一つは、小学校から高校までの間に、富士山に一度は登るということで、小学校だったら5合目までしか行けないかもしれないけれども、中学、高校で頂上を目指す。健康法にもなるので、ちゃんと頂上まで行けるようになることを、静岡県全ての学校が目指して歩くとか、そういうことができるようにするとアイデンティティーがあるという感じがします。

矢野委員長： 面白いですね。

今のお話を聞いていて思ったのですけれども、静岡県の中に特徴があるいい学校がいっぱいあるのです。これをもう一度、再発見したらどうでしょうか。この資料の中に埋もれているのですが、これを一つ取り上げただけでも立派な話題になります。

実は先日、沼津の加藤学園暁秀というところに行ったのです。小学校から徹底した英語教育をやっているのです。以前、別府の立命館や秋田の国際教養大学など、大学で英語教育を徹底的にやっているところを見ましたけれども、県内にもそういう学校があるのです。本当に感心しました。英語でバカロレアを取れるのです。校長先生以下、大変な情熱を示して教育をやっているし、授業も見てきましたけれども、実に元気いっぱいです。

杉さんも一緒に行ってこられたので、少し感想をどうぞ。

杉 委 員： 私は加藤学園というのは、サッカーが強い学校という程度の認識しかなかったのですけれども、学校法人の中に暁秀中・高等学校がありまして、1983年に開校しているのです。

1998年に日英両方の言葉を使って学習するバイリンガルコースをつかって、2000年にバカロレア機構の中等教育課程、YMPの認定を受けております。

2002年に大学入学資格ディプロマプログラム、DPを取っている。これを取ると、大学入試は、一般には一生懸命知識を頭に詰め込んで、正解率を求める入学試験を突破するのですけれども、それが要らないのです。DPの点数が何点あると、マサチューセッツ工科大学に行けるとか、東京大学に行けるということになるのです。

結果として、この学校では2003年から2016年の14年間で、世界ランキング28位の東京大学以上に43人送り込んでいます。

それでは、この学校では学習者の像としてどういうものを求めるかという、まず知識がある人というのは一つあるのですが、コミュニケーションできる人、正義感のある人、心を開く人、思いやりのある人、バランスのとれた人、振り返ることができる人など、こういう大学入試突破を求める学校では出てこないような言葉が入っています。

矢野委員長と一緒に教育の現場も見ましたけれども、「今日は、これを覚えなさい」ではないのです。一つのテーマを置いて、それが正しいか正しくないか、私はどう思うかというのを英語でディスカッションするのです。

私がそれを見ていて感じたのは、自ら考える力を養っているからか、生徒たちの顔が生き生きして見えたことです。先ほどお話のあった自信、生きる自信を持っていて、自慢げではなく、誇らしげでもないのです。何か自信に満ち溢れて、明るくて、挨拶もすごくて、これが人間教育だと思いました。

ただ、子供たちは小学校からずっと進級していくのですけれども、最

初に80人の枠に入った人がずっと上がっていくのです。英語がベースにありますので、途中から入れるのは帰国子女くらいで、普通の子はなかなか入れないそうです。英語が垣根になって世界に行くことができないというものを取り払うのがベースにあるので、そうなっているのですけれども、英語を別にしても、ここの教育精神はいろいろなところに取り入れられたらいいのではないかと感じました。

矢野委員長： ありがとうございます。

少し静岡県の学校も研究しましょう。

加藤さんは、若者の教育を長年やっつけらっしゃるので、少しお話ししていただけますか。

加藤委員： 私も高校生を次世代に育成するということで、この夏で14回となり、2,500人近い卒業生がいて、やっと一番上の卒業生が30歳ぐらいになりました。

社会でようやく活躍できるようになって、例えばカンボジアで、貧しい人でも誰でも行けるような病院をつくるという夢を抱いて起業した卒業生もいますし、留学したり、外交官になったり、国連機関で勤めたり様々です。私が一番力を入れているのは、来た高校生たちを崖から突き落とすという仕事です。

昨今、親が過保護になっていますので、2週間お預かりするのですが、最初に「留学したい人」と手を挙げさせると、ぼちぼちしか手を挙げないのです。みんな地方から来ている高校生たちですから「海外に行ったら危ない、テロに遭う」と留学に消極的な高校生が多いですが、2週間経って「留学したい人」と聞くと、ほぼみんな手を挙げます。

海外に行って他流試合をする。外に出たからこそ、富士山の良さもまた再認識できるわけです。宮城さんは、他流試合でまさに頂点を極めた方です。NHKのニュースを見て本当に感動しましたが、そういうロールモデルがいらっしゃるのですから、是非、教育の中で海外に出ることの素晴らしさを伝えていただきたいと思います。

学校はまだまだ保守的な側面がありますし、受験に注力しすぎる傾向もあります。これからの時代、何があるかわからない混沌とした時代ですから生き抜く力が求められます。

今日は余り出なかった議論ですが、私は高校生を対象にしたリーダー塾を主宰していますが、高校生はもう結構でき上がっています。ですから、できれば小学校から生きた教育、特に芸術の分野は、私は小学校ではないかなと。

ある先生にお伺いすると、小学校1年生のときに描いた絵と小学校6年生のときの絵を比べると、小学校1年生のほうがよほど独創的だと。小学校6年生になると、人間はこういうふうに描かないといけないと固定観念を持ってしまいます。先ほど渡邊先生がおっしゃっていたよ

うに、猫も犬もみんな人間の目になってしまいます。

それから、私は先の東京オリンピックの時にアメリカに住んでいたのですが、日本で幼稚園のときにすごく厳しい幼稚園に通っていて、私は規格外だったものですから、いつも怒られてばかりだったのです。だめのだめ子ちゃんでした。

それがアメリカに行って、お絵描きの時間に太陽を赤く塗ったのですが、日本人としては当然と言えば当然なのですが、先生が「暁子の机の周りに集合」とどうも言っただけなのです。私は幼稚園で、当時まだ行って何日かしか経っていないので、英語ができなかったのですが、鮮明に覚えています。「ああ、また怒られる」と頭を抱えました。ところが、みんなが手をたたいてすごく拍手してくれたのです。

後で父に聞いたら、「先生が、暁子の太陽は綺麗だ。日の出とか日の入りのときはこういう色になるよね。こういう色に描いた人は暁子しかいない」と言って、拍手をして褒めてくれました。私の人生がまさにバラ色に変わったのです。何かをやればできる、誰かに認めてもらえると思いました。

英語もそうだと思うのですが、日本ではグラマーを正しくやらなければいけない。今では小学生でも、語学をやっている子が増えています。皆さん、楽しんで学んでいるのでしょうか。

もっと自由にやらせるということ、是非静岡の小学校、幼稚園とか保育園からでもいいと思いますが、自由な発想でさせるということがすごく大事だと思います。それであれば別にお金も要らないわけですから、先生さえそういう教育をすれば、明日からでもできるのではないかと思います。

矢野委員長： 次回のテーマが幼保教育ですから、是非いろいろといいアイデアを出してください。

白井さん、いかがですか。

白井委員： お伺いしたいことがあるのですが、資料31ページから部活動のことがいろいろ載っているのですが、今日出なかった意見として、顧問不足とか、少子化でだんだん部活動がスクラップされていく。

例えばもう部員が集まらないから、こちらは廃部で、野球をやっていた子はサッカーをやりたいというような感じで、選び先がなくなっていくのでしょうか。

芸術のほうも見てみると、演劇部がある高校は3分の1から半分ぐらいです。芸術をやりたい人は、器楽になったり、選び先がなかったり、本当は音楽の先生が集まらないとか、ほかの教科の先生が教えないといけないぐらい学校教育の人材が足りないということが言われているので、実際に顧問不足がどういう状況にあるのかとか、教科の先生も足りていない状況なのかどうかとか、それからスポーツ人材バンクは

ありますけれども、芸術人材バンクはあるのかとか、基本的なことなのですが、実情を教えて欲しいと思いました。

矢野委員長： 次の機会にでも事務局から、またレポートしていただきたいと思いますが、人材バンクについては、文武芸のうちの武であるスポーツから始めて、まずそこを充実させようということになっています。ほかの分野にもだんだん広げていきたいと思っています。

片野さん、いかがですか。

片野委員： 今回はスポーツと芸術分野ということで、僕自身は門外漢なところがあると思ひ静かにしていたら、トリのような形になってしまったのかもしれないけれども、最後に話をさせていただきます。

農業、農芸というのは、スポーツなのか芸術なのか学問なのかというふうに考えてみると、3つ全部を消化した上でその先にあるものなのかなと思います。

園芸、農芸の「芸」という字を書きますと、普通、芸能人や芸術の「芸」ですけれども、本来、農業の「芸」というのは、くさかんむりに熱海のれんがを取ったものに云々かんぬんの云々、これは耕すという意味があるのですけれども、それで「藝」というのです。

その中には、土と木と丸という字があって、丸というのは人の手なのです。僕のイメージだと、植物をこういうふうに人が手を丸っとしながら植えているような、そういうイメージです。

それが農藝であって、それを簡略化したものが今、この資料の12ページあたりに書いてあるのですが、「園芸・庭いじり・ガーデニング」と一緒くたになっているのです。

こうしてみると、この園芸は造園に近い園芸なのかと思ったりもして、この字自身がいろいろな意味を持ち過ぎてしまって、実際子供たちが何に興味があるのか、野菜なのか花卉なのか、それとも違うものなのか。それこそ石庭でも、石の庭と書いて石庭です。

でも「園芸ではないか」と言われるのではないかと。でも、この園芸の根幹は何かと言ったら、植物が絶対的に存在するのです。この植物を育てるということが園芸の根幹にあるという中で、12ページのこのカテゴリーの中に入れられることが少し違うのではないかと違和感があったのです。

実際、野菜づくりとか、花づくりとかも、趣味、娯楽の部分であってしかるべきではないのかなと。8.9%、4.6%、3.1%とだんだん右肩下がりに下がっていますが、これをもっと区分けしていくと、野菜が好きな子や花が好きな子、育てることが好きな子がいるのではないかというふうにも見えてくるのですけれども、これだけだと、娯楽として、趣味として、農業はないのかなと思ってしまう。

そういう中で、「農業は芸術分野やスポーツ分野とは違うから、これ

でいいのではないか」という話になってしまわないようにしなければならないのが、農業関係者の務めであると思います。

先ほど埴委員が、高校生なり中学生が現場に行って、それを単位として認めるということは、少し難しいのではないかとおっしゃられたのですけれども、このJAバンク静岡アグリサポートプログラムの最初のページのほうにも丹那牛乳、私が牛乳を出荷している工場ですけれども、その近くに田方農業高等学校というのがありまして、その子供たちは本当にこの静岡地区でも珍しく牧場を持っているのです。自分たちで酪農をやっているのです。

そして最近、自分たちでコーヒー牛乳を売り出したりして、自前で殺菌をして販売までこぎつけています。そういう子たちですから、将来、丹那牛乳に勤めてくれたりとか、酪農ヘルパー、酪農家をお手伝いするような役割をしてくれる子とか、実際に酪農家になったりとか、そういう人材を輩出しているありがたい高校なのです。

そういう高校ですから、できれば夏休みでもどこでもいいので、実際に現場に行って、それを学ぶような仕組みづくりをしたほうがいいと思います。ここ最近、自分の牧場以外の全体で見ても、大学生は来ても、なかなか高校生は田農生、農業高校生すら来ないのが現状なのです。

インターンシップなどで来る場合はあるのですけれども、それは高校1年生、2年生で、そういう子たちが来やすくなるようにするにはどうしたらいいのか。学校で蓄えたスキルや知識が、果たして産業社会と合致しているのかどうか。学校社会だけの感性で終わって欲しくないというか、学校だけでそれぞれ牛を飼って、加工もして販売もしているという、もうこれは一貫して完結しているのですけれども、それが社会の産業として通用するかしないかはまた別の話なわけで、そういう部分を補完するにはどうしたらいいのか。

単位を上げることができないならば、アルバイトという形でもいいのかなど。ただ、アルバイトという形だとお金が発生します。静岡県の最低賃金を参照しますと800円以上かかる中で、農業者からすると、高校生を800円以上で雇うのは難しい話なので、どうすればお互いがよくなるのかといったときに、少し助成が出るという形をとれば、農家側もお金を多少なりとも払って、県も払って、子供を現場で勉強させることで、現場と学校での学びがつながるのではないかと思います。

取りとめのない話になってしまいましたが、芸術もスポーツも関係ないと思いますけれども、僕はそのように思いました。

矢野委員長： いろいろヒントがあると思います。ありがとうございました。
池上先生、いかがですか。全体を通じて何か。

池上副委員長： もう時間も余りないのでけれども、静岡県はとにかくSPACを持

っているというすごいアドバンテージがあって、それをもうとことんしゃぶり尽くすぐらい利用するという姿勢が大事だと思います。

また、高校レベルでそういう専門的な学びを得るようなことができれば、私どもの大学は静岡文化芸術大学ということで、演劇の演じる人を育てるわけではないけれども、そういった芸術をマネジメントする人材を育てる芸術文化学科がございますので、本県は小・中・高・大とつながるような人材育成ができる体制にあるので、今、演劇の話に焦点が合っていますけれども、是非初等教育段階から、今日のテーマである文化、芸術、スポーツに焦点を合わせたいいわゆる学科だけではない勉強をしっかりやっていきたいと思っています。

実は、先週シンガポールに行っていて、シンガポールの教育の状況などについても少し聞いてきました。子供たちの英語力や発想ということについては、恐らく今の日本の教育は全くかないません。かなわないけれども、逆にシンガポールの問題は何かというと、芸術的な創造性というのがこの国はからきしだめなのですよと言っていました。

その点は、日本の社会が非常に強い大きなアドバンテージを持っているところだと思いますので、是非、今日のテーマは日本の社会、とりわけ静岡県にアドバンテージがあるところで伸ばしていきたいと思っています。

矢野委員長： ありがとうございます。

先ほど申し上げたPR上手になるにはどうしたらいいかについては、次回に回したいと思います。

皆様の御発言が多岐にわたって誠に示唆の多い御発言ばかりなので、議長としてどうまとめていいのかよくわからないのですが、今日の議論を一度集約しまして、総合教育会議で御提案したいと思っています。

それでは、終わりになりますが、知事から一言お願いいたします。

川勝知事： 我々は、文武芸三道鼎立と言っております。

つまり、誰だって英数国理社ができることだけが重要ではなくて、それぞれの道が同じように重要だと言っているのです。実際は3つに分けられないでしょう。3つ以上であると思っておりますけれども、文武両道にいろいろな意味合いを含めて文武芸三道鼎立と言っているわけです。

日本はクールジャパンと言われているように、何をもってクールか。もちろんノーベル賞が21世紀になってアメリカに次いで第2位で、2桁ですから、イギリスもドイツもフランスも抜いてしまっていますから、恐らく学問が高いということは大事なのですけれども、スポーツで、あるいは芸術で素晴らしい人たちがいる。それから、日本の和食が世界でも無形文化遺産です。ですから、これは農作物の品質が非常に高いということと不可分の関係になっているのです。

そういう意味におきまして、実はそれを支えている人たちは英語ができるとか、算数ができるとかと関係ないのです。15までは義務教育で、税金を払って、国家が子供たちに教育を受けさせ、また教育を受ける権利を保障しているのです。それ以降は自由だと。そのときまでに生きる道を発見させればいい。

高校に行かせなければいけない。だけど大学に入るには、高校卒業程度認定試験を受けていけば行ける。それを高1から受けて、受ければ大学にも行けるじゃないですか。そのように、本当に学業ができる子は高校3年も同じことをやらされて、18歳卒業してからしか大学に行けない。そんなひどい話はあるかということがある。

逆に、別に高校に行かなくて、サッカーなり将棋なり、あるいはその他のものに打ち込むことがあってもいいと思う。その代わりに、高校、特に大学にいつでも入れるようにしておくことも大事で、何も22、23歳までに小・中・高・大まで行かなくてはならないということはありません。

それから、今の高校は先生も少ないし、また八ヶ岳と言われているところも100位以内にも入っていないわけです。ですから非常に疲弊していると思っております。つまり学業における疲弊が、スポーツや芸術にも及んでいるのではないかと思っております。そういう学業について上げるかは、それぞれお考えになるところがあると思いますけれども、今日出た議論は技芸を磨くということで、どういうふうにして、例えば演劇ですと、演劇科をSPACを中心に置いて、高校教育というか、小・中・高レベルのところまで還元させていくかということとは大きな課題になりました。

それから、また今日は山本さんが来ておられるということで、サッカー、あるいはゴルフも、もちろん野球もあります。それからラグビーも陸上もやっている。こうした全部のスポーツはいかないけれども、初めからゴルフ学校があるように、韓国などはそうしているではありませんか。あるいはうちだって、半永久的にJFAアカデミーを預かっております。あの子たちは宿舎に入って、プロを目指して一生懸命やっている。そのこと自体がアジアの人たちの、あるいは世界の人たちの魅力の中心になっているわけです。

それをどう制度化するかということで、我々は出口が見えないと。ただし、芸術あるいはスポーツ、そういうところはもっと可能性があるもので広げていこうということでもあります。

よく狭く深いと言うではないですか。あれは間違っていると思うのです。広く深くです。水たまりは狭くて浅いのです。だから、太平洋は広くて深いのですよ。同じようにそれは富士山と思えばいい。ああいう高い山は裾野が非常に広いわけです。だから頂上を目指す人は本当にわずかですが、それを支えているその裾野を大きく広くしないといけない。

そういう意味で、いかに広くするか。全員がトップになれないのです。しかし、スポーツは下手だけど大好きだと。芸術は無芸だと、大食だと。だけど芸術は愛していると。学問は全然できないけれど、学業に対して高い敬意と尊敬を払っていると。こういう非常に裾野の広いものをつくっていかなければいけないということで、これまでののがらぼんです。

数えて15のときには元服です。それで一人前になれない人はいつまで待つか。34まで待ちます。なぜかと言うと「30にして立つ」と言うのではないですか。ですから30と言ったって、四捨五入すれば25から34までありますから、ですから34までは失敗してよろしいと。34までには一人前になって、己の限界、あるいは可能性を、なかんずく限界を知って、そして40不惑に向けて己の分に応じた生き方をすればよろしい。しかし、30までは失敗を許すと。いろいろなことをやったらよろしいということで、そういう社会をつくっていきたいと思います。

これは要するに人づくりであります。それはなるべく小さいときからそういう観点で人を育てると。可能性を見出してあげると。こういう一人一人が、先ほどの言葉で言えば、代替不可能なのです。イレプレイシブルなのですよ。誰一人その人の代わりになる人はいませんので、そのような形での可能性を幅広く探っていく。今までの文科省の、ああいう大学を出て、ろくなやつがないわけですよ。そんな人たちから自立すると。

地方の自立。これは教育の自立からということで、我々が自分たちの子供たちは引き受けると。県外からお越しになる方たちも一切差別しない。肌の色とか国籍とか宗教とか一切差別しない。こちらにいる子は、我々大人が自分たちの得意な分野においてやっていく。

そのために人材バンクをしっかりと、大人全体が学校の先生のつもりでやるということにしていきたいと思っておりまして、今日は非常に幅広い意見が出まして、これを一点突破全面展開です。どこかで一点突破するような形にしたいと思っておりまして、演劇だとか、あるいはサッカーだとか、あるいはラグビーだとか、幾つか切り口があるかと思いますが、これもそういったら難しいと思いますが、隣に新しい制度をつくり上げていこうと。

前の制度を潰すのではありません。ちょうど馬車が走っているその隣に鉄道ができて、鉄道の隣に自動車道路ができる。別にそれは馬車を潰してやるのではありません。鉄道を潰して自動車道路をつくるわけではありません。その傍らに新しい人の生きる道の選択肢を我々が提供していこうと、こういう考えでおりますので、是非よろしく願いいたします。以上でございます。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

皆様の御意見を踏まえまして、これという具体的な提案になるものも

ありますし、問題提起という形になるかもしれませんが、それらをまとめまして、知事から総合教育会議でお話しいただくわけですが、まとめについては委員長にお任せをいただければ幸いです。

それでは、今日の議事はこれで終わりましたので、進行を事務局にお返しします。

事務局： 皆様、長時間にわたり、熱心な御議論ありがとうございました。
次回、第3回実践委員会は、11月中の開催を予定しております。詳細につきましては、後日、事務局から皆様に御連絡をいたします。
以上をもちまして第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様、お疲れさまでございました。